

推薦書（案）の前回委員会からの変更点について

1. 推薦地の範囲

- 前回より大きな変更無し
 - 表 1-1 推薦地の緯度経度と面積表に、推薦地・緩衝地帯の面積（暫定値）を記載。
 - 4 地域の推薦区域・緩衝地帯が確定後、範囲図等を挿入。

2. 資産の内容

2. a. 1. 推薦地の自然環境概要

- ※ 下記「2. a. 1. 2. 地形・地質」から「2. a. 1. 3. 植生」までを、推薦地の価値の背景となる「舞台装置」の説明と位置づけ。
- ※ 資産の内容を説明するにあたって、地域の範囲や生物の固有性などの用語を最初に整理した。

2. a. 1. 1. 地形・地質

- 推薦書内で用いる、推薦地とその周辺の名称・地域区分について、自然科学系において使用されている名称・地域区分をもとに定義を記載（図 2-1）。
- 4 島の面積・最高標高（表 2-2）、地質図（図 2-3）を追加。
- 「中琉球と南琉球の地形発達史」は、「2. a. 3. 地史と種分化」へ移動。

2. a. 1. 2. 気候

- 「コラム：世界屈指の暖流・黒潮」は割愛。

2. a. 1. 3. 植生

- 記述内容を整理した。

2. a. 2. 生物相

- ※ 本節を、クライテリア(x)：多くの国際的希少種や固有種の生息・生育地であり、世界的に見た生物多様性保全上重要な地域、の説明と位置づけ。
 - 琉球列島に多様な生物相が形成された背景の説明として、生物の進入過程のイメージ図と事例（図 2-14、表 2-5）を追加。
 - 世界的な生物多様性ホットスポットの 1 つ「日本」全体の種数に対する、推薦地の種数、固有種数、絶滅危惧種数、それらの割合の説明を追加（表 2-6）。
 - 以下、「2. a. 2. 1. 植物相」から「2. a. 2. 2. 7. 淡水産甲殻十脚類」まで、分類群毎に種数、固有種数・率、絶滅危惧種数・率、国際的な絶滅危惧種について説明。説明に必要な表などを追加・修正。
 - 主に絶滅危惧種について説明し、固有種は、「2. a. 3. 地史と種分化」で説明。

2. a. 3. 地史と種分化

※ 本節を、クライテリア(ix)：大陸島における独特な生物進化の過程を明確に表す生態系の顕著な見本、の説明と位置づけ。

2. a. 3. 1. 地史

- 大陸島の種分化の背景として、「2. a. 1. 1. 地形・地質」よりこちらへ移動。
- 地質学的情報と専門家ヒアリングを元に、琉球弧の発達史の概要図を作成／追加（図 2-17）。

2. a. 3. 2. 地史と陸生生物の種分化

- 推薦地を種分化のパターンの違いから、中琉球（奄美大島、徳之島、沖縄島北部）と南琉球（西表島）の大きく 2 つの地域に区分して説明した。
- 各地域の種分化のパターンと代表的な陸生動物種を表で整理した（表 2-31）。
- 各地域の種分化のパターンを示す具体的な種・種群の事例は、最も代表的・特徴的な事例に絞ってコラムとして掲載し、理解を助けるよう図示を工夫した。
- 琉球列島の古地理と生物の動向のわかりやすい説明のため、「琉球弧の発達史」の概要図をベースに、生物側の動向を記載した図を作成・追加した（図 2-21）。

2. a. 4. 島嶼生態系への動物の適応進化

- 前回まで「小規模な島嶼における高次捕食者の非常に少ない特異な生態系」として、主に沖縄島北部を事例に記述していた。
- 今回、中琉球と南琉球で生態系の構成要素となる「高次捕食者」の存在の違いに着目し、両地域で異なる生態系が形成されていること、それらの生態系への動物の適応進化の説明とした。

2. a. 5. 自然資源の利用状況

- ※ 前回まで「人間との関わり（産業）」として農林業の過去の経緯と現況を記載したが、本節では現況に関する事項を扱い、過去の経緯は「2. b. 歴史と変遷」へ移した。
- 4 地域の人口・世帯数を示し、いずれも有人島であることを示した（表 2-32）。
 - 産業別人口の説明を追加し、推薦地の 4 地域では自然資源の利用にかかる第 1 次産業従事者の割合が少ないことを示した（図 2-22）。
 - 水産業にかかる説明を追加した。

2. b. 歴史と変遷

2. b. 1. 歴史

- 記述内容の整理と共に、年表は戦後の特別措置法の変遷とした。

2. b. 2. 主要産業の歴史

- 農林業の過去の経緯は、本節で記述することとした。

3. 登録の価値証明

3. 1. a. 資産の概要

3. 1. b. 該当するクライテリア

- 記述内容を精査した。

3. 1. c. 完全性の宣言

- 記述内容と構成を精査した。
- 種分化のパターンや分布する国際的な絶滅危惧種が異なる中琉球と南琉球を同時に含むことで、大陸島の多様な種分化がよく見えることを説明。
- 自然林と回復過程の二次林、異なる地質、多様な地形を含むこと。4 地域は黒潮、気候、地史等の影響の下で強い関連性があり、どれが欠けても全体像の理解と多様性の保全が出来ないことを説明。
- 4 地域の選定理由として、固有種数・絶滅危惧種数と面積の関係図（図 3-1）を追加。

3. 1. e. 保護・管理の要件

- 今回新たに作成した。

3. 2. 比較分析

※ 前回より記述内容を大幅に整理した。また、UNEP-WCMC が IUCN の評価のために作成する比較解析の作成手法の解説書も参考に、比較項目・比較対象を検討した。

3. 2. 1. 国内比較

- 国内の自然遺産の種数の比較表を追加した。

3. 2. 2. 生物地理区分における代表性・保全の優先性の比較

- 世界的に同一の生物地理区分における代表性の比較を追加した。
- 推薦地が選定されている、地球規模の保全優占地域を表で示した（表 3-6）

3. 2. 3. 進化の生態学的・生物学的特徴に関する比較

- 島嶼群で地史と種分化・固有化のプロセスが似ている地域（カリブ海諸島、インドネシア、カリフォルニア湾、ニューカレドニア）と種分化・固有化のプロセスを比較した。

3. 2. 4. 生物の種の多様性に関する比較

- 島嶼の世界遺産地域で亜熱帯の目安として緯度約 20~30° の地域及び、近隣の台湾、バタン諸島、バブヤン諸島と、生物の種数・固有種数（率）を比較した。
- 推薦地が選定されている、地域レベルの地球規模保全優先地域を表で示した（表 3-13）

3. 3. 顕著な普遍的価値の宣言案

- 作成中。

4. 保全状況及び資産へ影響を与える諸条件

4.a 現在の保全状況

- 保全状況は、「6. モニタリング」で主要指標とした 3 種（アマミノクロウサギ、イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナ）についての記述に整理した。
- 現在の主な脅威と対策は、外来種（マングース、ノネコ）、交通事故、違法採集の記述に整理した。

4.b 影響要因

- 現在、推薦地に与えている影響は明瞭ではないが、将来的に影響を与える可能性があるものについて、ここに整理した。
- マングース、ノネコ以外の外来種については、下記のように整理して記述した。
 - ◇ 現在推薦地を含む 4 地域に侵入していて影響は大きくないが、将来の影響が懸念されるもの。
 - ◇ 推薦地を含む 4 島の周辺島嶼に侵入していて、今後影響の可能性が懸念されるもの。
- 観光利用については、地域別に記述していた項目を、「過去数年の観光統計」、「主要な利用形態」、「想定環境容量及び来訪者管理の計画」として項目を整理した。
- 想定環境容量は、現状では明確に設定されたものが無いため、持続可能な利用として、各地域のエコツーリズム推進の取り組み状況を表で整理して掲載した（表 4-10 ～12）

5. 保護管理

- 今回新たに作成した（一部作成中）。

6. モニタリング

※ 今回新たに作成した。

- 世界遺産登録後、遺産価値や完全性の指標として、将来にわたってモニタリングする主要指標として、下記の観点から 3 種（アマミノクロウサギ、イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナ）を選定した（表 6-1）。
 - ◇ 各島の生態系・生物多様性の保全上、フラッグシップ的な固有種・絶滅危惧種。
 - ◇ 種の保存法で国内希少野生動植物種に指定され、保護増殖事業計画に基づいたモニタリングや対策が、多様な関係機関の協力の下、継続的に実施されている。
- 観光活動は、遺産価値への理解を深める機会を提供する一方で、無秩序な事業拡大や過剰利用は遺産価値を損なう要因となる可能性があるため主要指標に加えた。
- 保全状況や保護管理対策の効果を把握する上で、定期的実施されている調査・対策事業等から得られる情報で、主要指標に加えて補助的に利用可能な指標は別途整理した（表 6-2）。